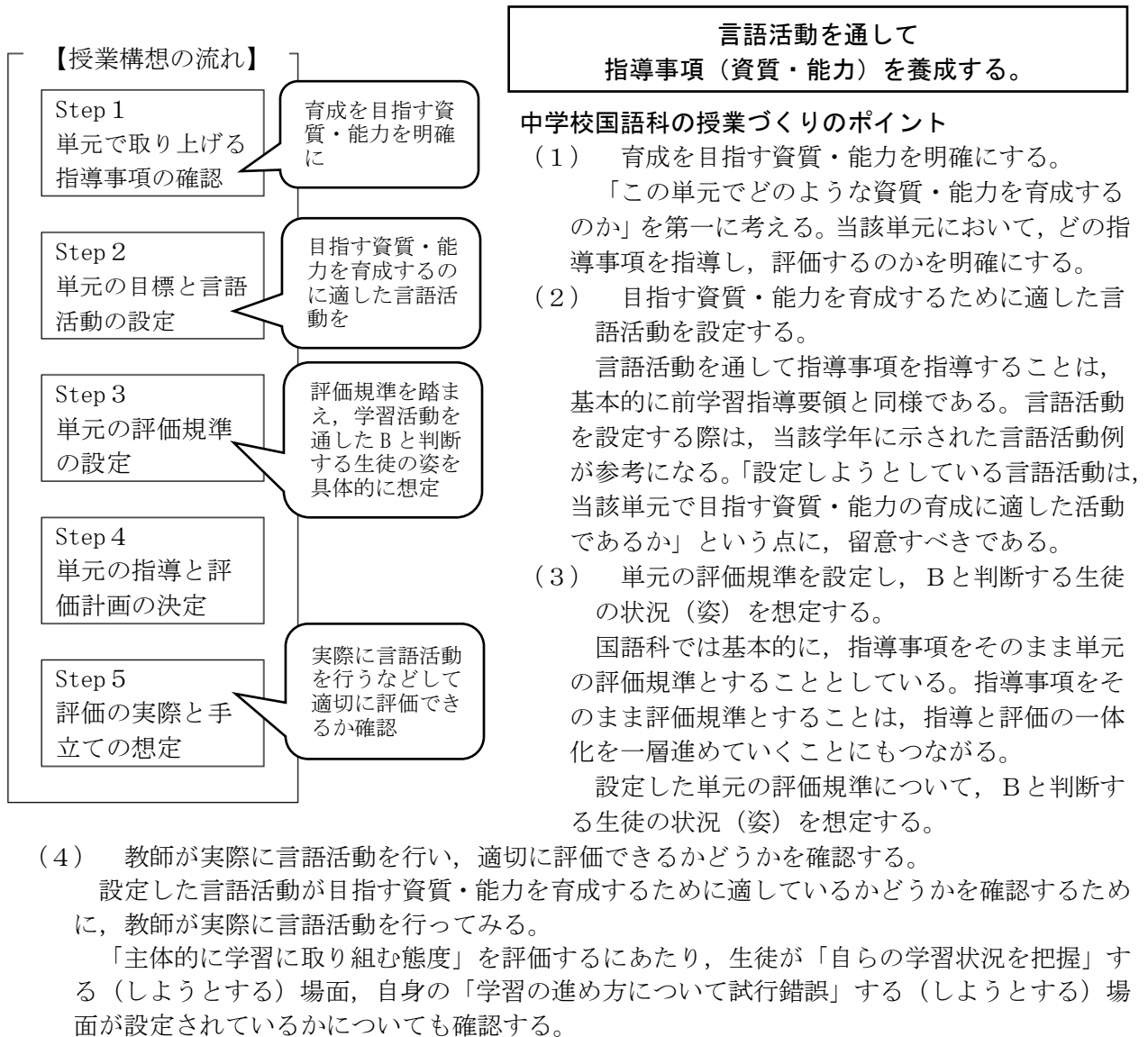


中学校国語

1 中学校国語科の指導と評価について



2 中学校国語科における1人1台端末の活用について

(1) はじめに 課題意識の共有

教育にICTを積極的に取り入れることの必要性について理解する。

- ① 端末が自分の手元にあるということは、ちょっとした疑問を解決したり、気になった内容を確認したりするために検索することを可能にする。
- ② 社会の担い手となっていく生徒が、日々の学習で、個々の必要に応じて端末を活用しながら課題を解決するべく学習を進めていくことは必然の流れといえる。
- ③ 国語科の授業に照らしていえば、国語辞典やノート等と同様、いつでも気軽に使えるツールの一つとして端末を位置づけるということである。

『中等教育資料』令和3年7月号より抜粋

(2) 現状の把握

中学校国語科では、これまでも、情報収集や情報発信の手段として、インターネットや電子辞書の活用、コンピュータによる発表資料の作成やプロジェクターによる提示など、コンピュータや情報通信ネットワークを活用する機会を設けてきている。ゼロからの出発ではない。

(3) 学習指導要領の確認

第2「2 内容」

〔思考力、判断力、表現力等〕

第2学年「A話すこと・聞くこと」

ウ 資料や機器を用いるなどして、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること。

第2学年「B書くこと」

イ 社会生活に必要な手紙や電子メールを書くなどに、伝えたいことを相手や媒体を考慮して書く活動。

第2学年「C読むこと」

ウ 本や新聞、インターネットなどから集めた情報を活用し、出典を明らかにしながら、考えたことなどを説明したり提案したりする活動。

内容に明記されているのは各領域ともに第2学年であるが、各学年、いずれの領域の「内容」においても、ICTの効果的な活用方法や活用場面などを考え、積極的な活用が期待されている。

(4) 各領域での活用事例

① 「A 話すこと・聞くこと」

自分のスピーチを自分の端末で録画して、表現を改善する

- ・ 自分のスピーチを客観的に見ることで、自分の考えが分かりやすく伝わるような表現になっているかを自覚する機会となる。
- ・ 練習の必要性を認識させ、練習を繰り返しながら聞き手に伝わるような表現の工夫することにつながる。

(留意点)

- ・ 話し手が聞き手の反応を見ながら話すこと。
- ・ 身振り手振り等で表現すること。
- ・ 話してから聞き手への一方向の情報伝達に偏らないこと。

② 「B 書くこと」

文書作成ソフトの校閲機能を用いながら、各自文章を書く

- ・ 文書作成ソフトで随筆の下書きをする。(ICTが苦手な生徒用に、必要に応じて使い方の簡易な説明プリントを配布する等の配慮があると良い。)
- ・ グループで下書きを読み合い、表記や語句の用法、叙述の仕方などについてコメント機能を用いてコメントし合う。(「〇〇だから、△△のほうがよい」といった文型を例示)

文章を書く場面においては、ICTはノートよりも試行錯誤しやすい側面もある。

③ 「C 読むこと」

目的に応じて印や付箋を付しながら、個々にとって必要な情報を正確に読む

- ・ 1人1台端末の使用により、必要な情報をPDFにして保存し、必要とする箇所に印や付箋を付しながらじっくり読むことが可能になる。これにより、情報を正確に読み、目的に応じて適切な箇所を活用することにつながる。
- ・ 自分の考えを表す際に、検索した情報を引用したい場合、コピーアンドペーストすることで、正確に引用することができる。(マナーをしっかりと守る指導も必要)

3 参考となる資料等について

- (1) 「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 中学校国語
(国立教育政策研究所教育課程研究センター 令和2年3月)
- (2) 「中等教育資料」令和3年7月号(学事出版)